

田川地区の県立高校再編整備計画(第2次計画)及び庄内中高一貫校(仮称)に係る  
保護者等説明会【庄内町会場】記録(要旨)

- 1 日 時 令和元年7月8日(月) 午後7時から午後8時30分
- 2 場 所 庄内町文化創造館 響ホール(庄内町余目字仲谷地280)
- 3 出席者 地域の方々 41名  
県教委 須貝教育次長、生島高校改革推進室長、伊藤高校改革推進室長補佐  
奥山高校改革主査、丹野高校改革主査、安達高校改革主査
- 4 内 容 生島室長から説明後、質疑応答

## 5 質疑応答概要

(質問・意見)

庄内中高一貫校(仮称)の部活動をどのように考えているのか。シーズン制にして、いろいろな競技ができるようにしてはどうか。

(県教委)

東桜学館中学校・高校の場合は、母体校の楯岡高校の部活動を中心に検討し、部活動を決定した。庄内中高一貫校(仮称)も、母体校となる鶴岡南高校及び鶴岡北高校の部活動を軸に、今後検討していくことになる。また、部活動のシーズン制については、御意見として頂戴しておくが、中高一貫教育校は、6年間の継続した教育活動に重点が置かれているとすると、同じ部活動が基本かと思う。

部活動については、中高一貫教育校は、中学3年で引退せず、高校生と一緒に活動することが、特例として認められている。なお、東桜学館中学校の場合は、広域から生徒が通学していることを踏まえ、電車時刻等に合わせ、午後6時ごろに部活動を終了している。

(質問・意見)

庄内中高一貫校(仮称)の立地について、交通の混雑が予想される。公共交通機関が乏しいところの対応はどのように考えているか。

(県教委)

スクールバスについては、入学者の居住地が広範囲となることが予想されるため、スクールバスを全ての地域に行き渡らせることは、制度設計が大変難しい。また、特定の学校にスクールバスを運行することは、その学校だけが有利になることにつながり設定できない。また、民間業者を圧迫することにつながる可能性もある。

(質問・意見)

- ① 東桜学館中学校・高校の場合、東桜学館中学校から東桜学館高校へ進まなかった生徒はどのくらいいるのか。
- ② 6年間の中で、中だるみが長期化する懸念がある。また、落ちこぼれや人脈が広がらないなどのデメリットもあるのではないか。

(県教委)

- ① 高校進学時に他の高校に進学することは、制度上可能である。東桜学館中学校から東桜学館高校への進学は97名であり、別に進学した2名は一家転住等の理由によるものである。中高一貫教育校は、6年間の計画的・継続的な教育活動により個性・能力の伸長を期すものであり、他の高校へ進学することは、高校の内容の一部を先取りして学習したことなどのメリットもなくなってしまう。
- ② 中だるみについては御指摘の通りであり、他県においてもこの課題の克服に向けて、中学3年の時期に語学研修を実施するなど、緊張感を持たせるような取組みを行うなどの対策をとっている。また、学力差が広がることも同様に課題であるが、こちらについても効果的な対策をとっている。こういった他県の事例などを参考にしていきたい。また、人間関係については、併設型中高一貫教育校の場合、高校から半数以上程度が新たに入学してくることもあり、人間関係が一新されるとともに、つながりが広がるメリットがある。

(質問・意見)

山添校が募集停止になり、庄内総合高校が開校するまでの期間の特別な支援を要する生徒の対応はどのように考えているか。

(県教委)

特定の高校だけが特別支援教育を担っているわけではなく、あらゆる高校でそのような生徒を支援していかなければならないと考えている。また、鶴岡南高校山添校は、文部科学省の「特別支援教育総合推進事業」の研究指定を受けるなど、特別支援教育にも力を入れ、実績を上げている。この取組みについては、他の高校にも紹介している。さらに、鶴岡南高校山添校で勤務し、ノウハウを身に付けた教員が異動先での勤務校で普及に努めるなどしながら、今後もすべての教員のスキルアップにつなげていく。高校への進路先の決定にあたっては、高校においても進路相談を受け付けているので、中学校の先生と相談しながら進めてほしい。

以上